

茨城県行方郡麻生町小高

小高福岡古墳

(小高福岡観音堂跡)

発掘調査報告書

2005年2月

小高福岡古墳発掘調査会
行方郡麻生町教育委員会

序 文

麻生町は霞ヶ浦と北浦の二つの大きな湖に面し、水と豊かな自然に恵まれています。古代より人々の生活する上で、恵まれた環境で会った本町には、幾多の歴史が刻まれた埋蔵文化財をはじめとする貴重な文化遺産がたくさん残されています。

町では、これらの埋蔵文化財を保護し、後世に継承することの重要性をふまえ、その対応に努力しているところです。

麻生町小高の砂利採取計画地内には埋蔵文化財が所在しておりました。文化財保護の立場から協議を重ねましたが、現状維持、保存が困難であることから、やむを得ず発掘調査をして記録保存することになりました。調査の結果、当該地は古墳ではなく約400年前、小高城落城の折、自害した城主の奥方とその腰元達の靈を慰めるために祀った観音堂基段跡と推定された。その下部からは縄文早期の炉跡が発見された、と報告を受けました。

調査にあたり、県教育庁文化課の指導のもと鹿行文化研究所・汀 安衛氏を調査主任として地元の方々、研究所各位の協力を得て調査を完了することができました。

ひとえに関係者各位のご指導、ご協力の賜ものと深く感謝申し上げます。

また、調査経費を負担してくださいました有限会社笠掛建材代表取締役笠掛泰廣氏に対しまして、深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

最後に、本書が幅広く活用され、貴重な文化資料となることを期待申し上げごあいさつといたします。

平成16年10月

小高福岡古墳発掘調査会長
麻生町教育委員会教育長

平 山 一 巳

抄 錄

フリガナ オダカフクオカコフンハツツヨウサホウコクショ(カンノンドウアト)
書名 小高福岡古墳発掘調査報告書 (小高福岡観音堂跡)
編著者名 汀 安衛
編集機関 鹿行文化研究所・〒311-2211 茨城県鹿嶋市青塚718の3
発行機関 麻生町教育委員会、小高福岡古墳発掘調査会
発行年日 茨城県行方郡麻生町麻生1561-9
西暦 2005年 2月28日

所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経
小高福岡古墳	茨城県行方郡麻生町大字小高字福岡	421	300	36° 10' 20"	140° 28' 10"
	620-1				

調査期間	調査原因
2004.9.2	砂利採取に伴う記録
2004.9.15	保存

所収遺跡名	種別	主な遺構	特記事項	その他
小高福岡古墳	堂宇跡 (塚)	堂宇跡 (炉跡)	堂宇跡下から縄文早期の炉跡が検出された。	古墳ではなく観音堂堂宇跡

例 言

- 1 本報告書は茨城県行方郡麻生町小高字福岡 620・1 番地に所在する福岡古墳（福岡観音堂跡）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は(株)笠掛建材の砂利採取事業に伴う記録保存の発掘調査で、調査対象面積は約 120 m²である。
- 3 調査は鹿行文化研究所の汀 安衛が担当した。
調査は平成 16 年 9 月 2 日～15 日の 13 日間で行った。整理作業は調査終了後開始した。
- 4 調査部分の南側は 30 年前に採土され欠失、急崖を呈していた。
- 5 調査会組織

会 長	平山 一巳	麻生町教育委員会教育長
副会長	茂木 岩夫	文化財審議会会长
理 事	宮内 賢志	文化財保護審議会委員(小高地区)
〃	門井 俊道	〃
〃	植田 敏雄	文化財保護審議会専門委員
〃	羽生 均	〃
〃	汀 安衛	主任調査員 鹿行文化研究所
〃	笠掛 泰廣	(有) 笠掛建材代表取締役
〃	高野 幸雄	麻生町教育委員会生涯学習課長
監 事	錦織 志元	(有) 笠掛建材営業部長
〃	高木 俊博	麻生町会計課長
幹 事	浅野 昌子	麻生町教育委員会生涯学習課教育係長
〃	高田 和明	麻生町 教育委員会生涯学習課

凡 例

- 1 本報告書の縮尺は図中に表示した。水系レベル標高を表示した。
- 2 本報告文、写真、図面、実測、トレースは汀が行った。
- 3 調査にあたり次のの方々にご協力を受けた。記して感謝の意を表したい。

茨城県教育庁文化課・麻生町教育委員会・鹿行教育事務所
高須 郁夫・山口 隆司・中村 泰彦・徳利 初代・橋本 光枝
大輪 タケ・成島 のぶ・茂木 一重・茂木 きん・羽生 洋子
小山田 ヨシエ・日暮 信雄

目 次

序 文	
抄 錄	
例 言	
凡 例	
I 遺跡の位置と周辺遺跡	1
II 調査に至る経過	2
● 調査日誌	2
III 測量調査と塚（基壇）	2
1 測量調査	2
2 土層	3
3 観音堂跡と基壇	4
4 観音堂の由来	5
● 福岡の觀音様	5
5 炉跡と出土遺物	6
IV 結び	7

挿図目次

1 第1図 遺跡の位置と環境	1
2 第2図 福岡古墳（観音堂基壇）測量図	3
3 第3図 古墳（基壇）土層図	4
4 第4図 観音堂基壇と建屋	4
5 第5図 塚（基壇）底部と炉跡	5
6 第6図 炉跡出土土器	6

図版目次

1 調査前清掃、土層層序 1区	7
2 塚（基壇）底部・炭化物・炉跡・層序・供養祭光景	8

I 遺跡の位置と周辺遺跡(第1図)

本古墳（以下観音堂跡は塚）は麻生町の北西部、霞ヶ浦東岸標高24m前後の馬の背状台地中ほどの最も括れた部分に占地している。附近は霞ヶ浦から入り込む大小の支谷が樹枝状に入り込み、台地周辺、縁辺には縄文時代から近世迄の多くの遺跡が散在し、古代から豊かな自然環境が存在していたと理解される。

南側には幅300m程の谷津田を挟んで公事塚古墳の存在した台地が有った。現在は、土砂採取した砂利、砂の選別場に成っている。さらに南側には皇徳寺古墳群、橋門古墳群が半島状台地の狭長な台地に散在して造られていた。台地中程の小高小学校南側には、縄文後期加曾利B式、安行I・II式を中心とした6ヶ所の地点貝塚が存在、貝塚の占地する台地は堀越の字が示す様に大きな堀と土塁が存在する要害跡である。本観音様の東側500mには行方郡域最大の規模をもつ中世後半の縄張りを持つ小高城跡が位置する。近くには堀の内遺跡がある。

本遺跡周辺の台地上部、また沖積地には多くの遺跡、古墳などが存在する豊かな史的環境の中にある。

福岡観音堂の台地先端部にも「コシマキ古墳」が存在し、話によると埋葬施設石材の一部が観音堂の中に重ねられている。と言われているが、遺存する石材かどうかは定かではない。



第1図 遺跡の位置と環境

II 調査に至る経過

事業者（笠掛建材）より砂利採取の申請があり鹿行教育事務所指導員と踏査、及び試掘を行い、町文化財保護審議会を開催した。「塚あるいは古墳であろう」との見解から、事業者には現況保存を促したが、工事の変更は困難である、とのことから記録保存のための発掘調査に至った。

- 6月 11日 遺跡発見届を県に提出
- 6月 15日 鹿行教育事務所に連絡し確認のため山田指導員、町文化財審議委員と踏査、塚一古墳発見。
- 6月 21日 原因者に現場で説明。
- 8月 3日 関係者と協議し「福岡古墳発掘調査会」を発足させる。原案の通り可決し9月2日より調査開始することになった。

● 調査日誌より

暑い日々が続く中山口 隆司、高須 郁夫、汀 安衛の三人で測量調査を行った。

9月 2日 門井皇徳寺住職の読經により供養を行い、調査開始。

前日の測量調査からほぼ形状、時期、性格は把握していた。よって四分割で1区・3区の調査を予定したが測量時の観察、測図、伝承等から観音堂跡の可能性が高いため、これを勘案して基段部の清掃と平面図と東西の横断面図を作成した。(第4図) かなり緻密な清掃をしたが、清掃中一枚の賽銭、現在の硬貨も発見出来なかった。

1区・3区の調査を開始。基壇状にして作られていたため版築が丁重に施され、それに酷暑、日日照りが続き固い。土層は、粘性を持つ砂質の黄褐色土であった。

暑さと固さで日陰を追っての調査で、体力勝負の日々がつづく。

9月 9日、土層に変化はなく古墳の封土の様相はない。石室、埋葬施設らしきものは確認できず、表土層の堆積も5~15cm前後と薄く築造後の時間、経過が看破された。

9月 11日、古墳の存在は否定され、見学に訪れた人、作業員の中からの話からも観音堂宇跡との可能性が高くなる。

9月 12日、重機で遺存部を排除し基底部を確認しさらに以前の遺構の有無を確認した所「炉跡」と思われる焼土と炭化粒子が確認された。調査の結果炉跡と判明、出土土器から縄文早期の炉跡と思われた。

9月 14 日本日で調査は終了とし、機材等は教育委員会が撤収する事になる。

9月 15日、調査機材を教育委員会が撤収し本日で、調査を終了とする。

III 測量調査と塚（基壇）（第2図）

1 測量調査

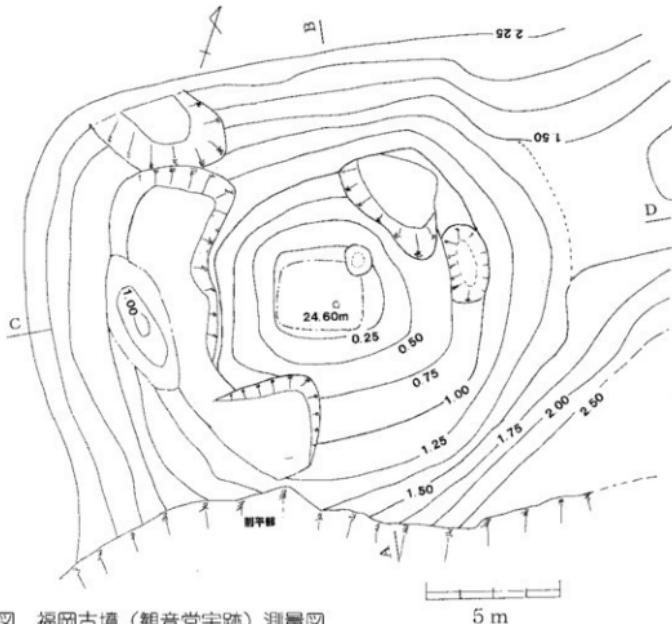
測量調査の時点でかなり変形した形、墳形をしている事が判明する。馬の背状で東西に走る台地の僅かに開けた狭い部分に構築されていた。以下測量調査の結果を述べる。標高は約24m60cm。

塚中央部やや東側に最高センターを測る。+20cm前後で長方形状の平坦部が存在(図中破線)-25cmではほぼ長方形プランが確認される。-50cmで方形状になり-75cmで平坦部が北側を除き巡り、この部分から上は円墳を改築されたとも推察されたが、古墳であれば方墳、盗掘、信仰状の塚などさまざまな事が推察された。しかし「塚」周辺の平坦部の存在は意識的な構築であり、古墳の可能性はかなり低くなった。-1mでは塚を取りまく感じで西側に平坦部が存在、かなり作為的に構築、伐採、清掃後の観察からより明確になった。西側に版築された小山が存在していた。

東側でも同様にカット面が-1m以内で観察され、こちらもほぼ方形プランを呈する。北側には平

壇部は存在しなかった。-1, 5 mでもやや崩れた方形プランを呈するほぼこの部分までが築造された塚（基壇）となった。

台地との走行部との間は僅かに掘り込み、隔絶したと推察される落ち込みが見られた。



第2図 福岡古墳（観音堂宇跡）測量図

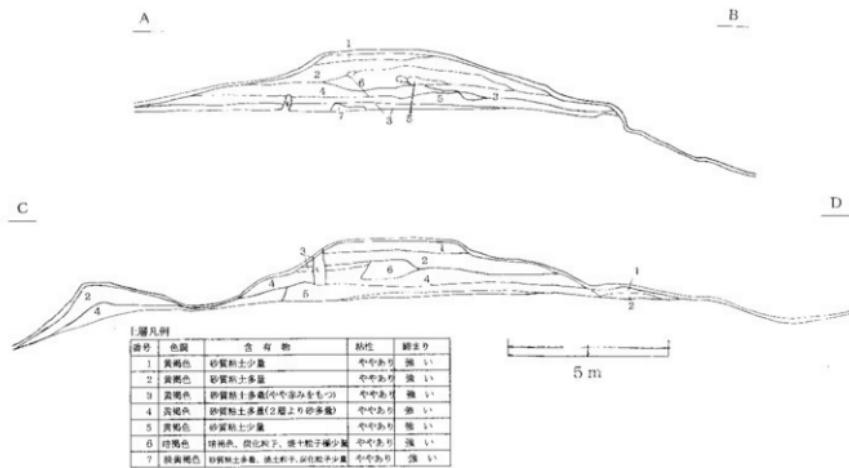
2 土層（第2図）

調査によって得られた土層の断面と盛土から基壇として構築された事が、推定できる。塚はおよそ三段に構築されていた。建屋部分（上部）、建屋下部の広場的平坦部（三段目）、この中間の段（中段）が認められ、これらの土層、構築状態、広場的平坦部の存在と西側の小山的盛土から古墳では無く觀音堂跡と想定できる。（平坦面は北側には存在しない）

層序から見れば、表土層は5~15 cm前後の堆積で高所とはいえ堆積が余りにも薄い。構築されてからの時間が非常に短い、木痕等の腐食痕、攪乱が少ない。立ち木の切り株の年代が三十年前後の年輪である。土層壁面が綺麗で古株等の攪乱が見られない。1層から5層まではやや粘性のある黄褐色土に少量のローム小ブロック、焼土、炭化粒子等が極微量混入していた。明確に判別出来るほどの積み別けの感覚は、感じられなれなかった。以上の点から極めて新しい時期に構築された堂宇跡と考えられる。

版築の為かなり良く締まり固く、以前の『土間』的で、ジレンで少しづつカットした。遺物は、3区から長さ90 cm程のスタジイの炭化材が1点検出された。

その他の遺物として縄文土器の細片が5片検出されたのみであった。



第3図 古墳（基壙）土層図

3 観音堂跡と建屋(第4図)

調査の結果「福岡古墳」ではなく観音堂跡と思われる。発掘調査前の予想でも変形していたた為「古墳」はやや無理が推察された。その為発掘調査に入る前に平面図を作成した。平面図から推察される建屋は、現在の道路際にある『福岡の観音堂』建屋「9尺×6尺」の堂跡と推察して問題のないことが窺われる。建屋は東西方向に9尺、南北方向に6尺の1, 5坪のお堂である。

現在の福岡の観音様は長軸、棟に対して拝所があり、これらからは観音堂は東向きに存在した事が窺われるが、当時は南向きの可能性は有る。礎石及び、跡は確認出来なかった。



第4図 観音堂字跡と建屋

4 福岡観音の由来

塚、堂宇跡の地山平坦部は、東西10m、南北12mのやや長円形状で周辺より一段30cm～50cm程の段差がある。西側では3m程の落差があり台地の小さな突端部に観音様を建立したと思われる。福岡観音堂の左側には、およそ次のような案内板、説明がある。

◎ 小高福岡の観音様

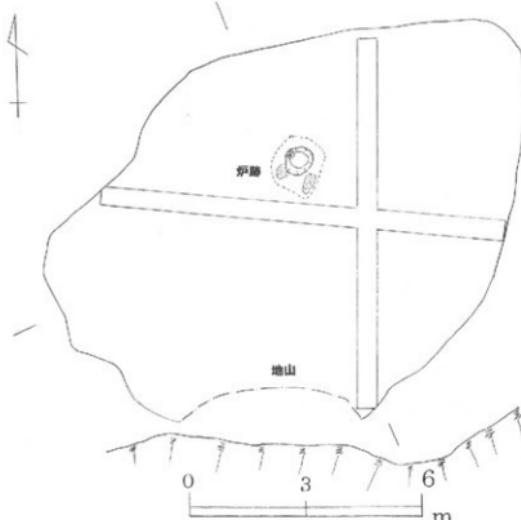
天正十九年(1591年)小高城落城の折、城主の奥方とその腰元六人がこの地で自害して果てられたと伝えられている。元禄年間、部落の人達、相議り、奥方達の靈を慰めるため、ゆかりの地に観音様を祀り、其の冥福をお祈りした処、安産子育てに靈験があり、從來、小高の遺臣、佐竹の遺臣とも其の子孫兔角の確執があったが、これを機会に民心融和の象徴として部落民協力して、昭和五十三年十一月新しく観音堂を建立し、盛大に落慶式が行われた、と説明されている。

○小高の史跡 門井 道隆著 麻生の文化第14号所集 麻生町郷土文化研究会昭和57年にも同様に記載され同年であることから間違いない処と理解される。

ここでは観音堂の建立のみの記載であるが、この時塚(基壇)も同様に版築して構築したと理解される。

それは前述した如く表土層の厚さ土層断面にもみられる通り「立ち木を伐採、下部を残して」盛土したことが判明している。塚(基壇)は観音堂建築に際し新たに整地して建て直した。と理解される。

最初に祀られた観音様は元禄年間(年号部分不明)そして約50年後の寛延年間、およそ300年前と思われ、この頃に土地を整地し多少の基壇状の形態を整えたと考えられ、それが5層上場前後かと思われる。そして石仏『如意輪観音像』等が祭られ覆いの家『お堂』が存在したと考えられる。が其の痕跡は今回の調査では皆無であった。



第5図 基壇基底部と炉跡

5 炉跡と出土遺物(第6図)

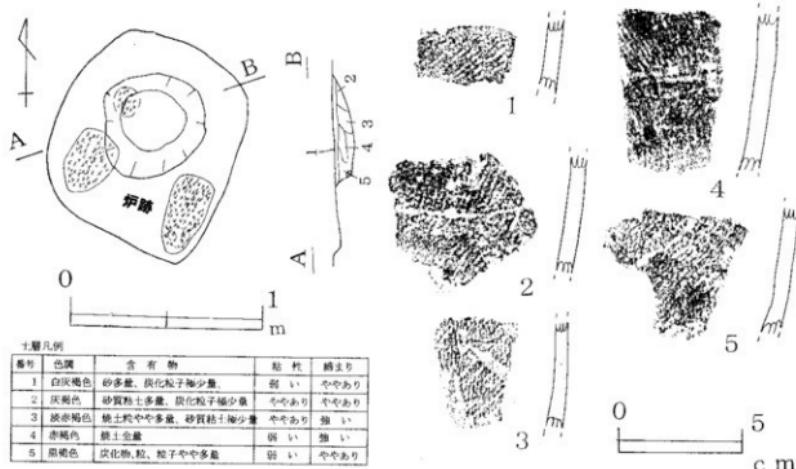
本塚（堂宇）下中央やや北寄りから炉跡が検出された。焼土粒子、炭化粒子等が95cm×1mの方形形状に認められ、ほぼ中央部に径90cm、深さ10cm程の橢円形状を呈する炉跡が検出された。掘り込みは鍋底状である。

層序は縦割り的で東側から灰褐色、淡赤褐色、灰褐色、赤褐色、黒褐色で炭化物、粒等が見られ粘性は総じて弱い。締まりはややある部分と強い部分がある。

炉跡周辺に石、土器等の匂い等は無く地山を素掘し炉跡として利用している。中からは1の土器が1点底部に刺さって出土している。

1は、深鉢形土器の胴上部破片で3cm程の細片でやや密な撚糸文が斜位に施文される。胎土は砂が多く焼成も悪い。2、3、4、5は何れも地山直上の黄褐色層から出土したもので何れも撚糸文土器胴部及び底部の破片で胎土には砂の混入が多くボロボロの状態である。2はやや大型の深鉢形土器胴部で磨耗が激しいが斜位に2段施文されている。3は器肉の薄い土器で付加されている。4は余りにも磨耗がひどい、一部に斜位のやや太めの施文が見られる。5は底部近くの破片で2同様の細い撚糸文が斜位に施文されている。

いずれも磨耗がひどく、また遭存状態も悪くさわる度に欠失する。出土した土器は何れも早期の撚糸文系の土器で、これらは炉跡内出土土器と胎土、層位から同一の時期と推察される。



第6図 炉跡出土土器

IV 結びにかえて

調査は、まさに酷暑と言っても過言ではない暑さの中で進められた。水田の稲穂も色づき終了時には消えていた。

当初、古墳として調査を開始したが、土層、周溝、近隣の人々の話から古墳ではないとの判断条件が現れてきた。途中から塚（基壇）と古墳の両面を考えで調査を進めたが土層からは基壇の可能性が強くなった。しかし古墳を改造する例も多々あり、「変則的古墳」の想定も捨てきれず調査は両面の考え方のもとで進めた。地山まで掘り進めところで埋葬施設は確認できず、層序、プラン、伝承等から堂宇跡の可能性が強くなった。地山確認面から更に十字状にトレンチを入れて確認したが埋葬施設の存在は認められなかった。

以上の諸条件から考えると、結論的に言えば本塚は「観音堂基壇」として構築されたと推定される。

基壇の下から縄文時代早期の炉跡の検出、撫糸文土器の伴出は何も遺物がなかった塚の調査で、教わられた遺構であった。台地先端、狭長な馬の背状の台地に9000年前の人々が火を焚き一時、キャンプを張っていた事を想像する時、家族団欒の光景、生活を想起する。

最後に、観音堂を建築奉納し石像を安置した時の関係者、大工、棟梁等を記録すべきと思われるが、ここでは省略したい。いつの日か心有る人が記録に残して貰いたい事を念じ、奥方、腰元の永遠に安らか成ることを祈念し結びに替えたい。〔了〕

参考文献

小高の史跡 麻生の文化第14号 門井道隆著



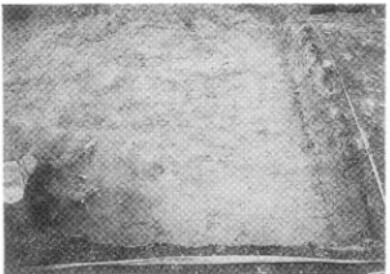
調査前清掃



清掃後の塹(基壇)部



1区南側表土と土層



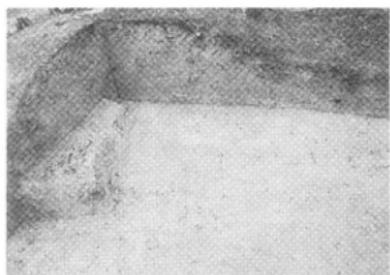
同左上から



1区南側土層



3区東側土層



1区西侧土層



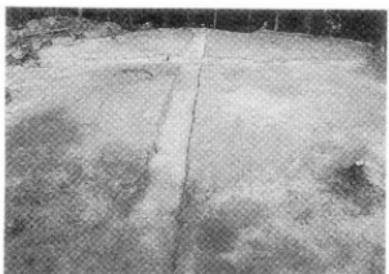
1区西侧端部塹(基壇)



表土と上部基壇状土層 3 区



4 区 トレンチ



塹(基壇)部除去後のトレンチ中央



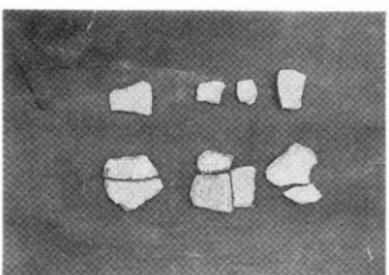
除去後のトレンチ南側



炉跡 土層



炉跡 全景



図版 2

出土土器



調査前供養祭

小高福岡古墳

(小高福岡観音堂跡)

発掘調査報告書

2005年2月

編集 鹿行文化研究所

汀 安 育

鹿嶋市青塚718-3

発行 小高福岡古墳発掘調査会

麻生町教育委員会

麻生町麻生1591-9